

〔野菜〕

1. 果菜類

1) イチゴ

品種動向:促成栽培において、福岡は「あまおう」、佐賀・大分・宮崎・鹿児島は「さがほのか」、熊本は「さがほのか」、「紅ほっぺ」および「ひのしずく」、長崎は「さちのか」が、それぞれの主要品種である。長崎で「ゆめのか」、熊本で「紅ほっぺ」の作付けがやや増加傾向である。宮崎における四季成り品種は「みやざきなつはるか」。各県ともに新品種に対する期待は大きく、育種を急いでいる。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島）：[平成 24 年定植] 11 月から 1 月までの低温で生育が遅延したが、以降の天候の回復により、収量は増加した県が多く、特に、佐賀および大分では過去最高の収量を記録した。台風の影響で定植が遅れた長崎では年内収量が非常に低かった。単価は昨年同様に高めに推移した。炭疽病、うどんこ病の発生はやや多かった。佐賀での CO₂ 施用が増加し、また、パッケージセンターの活用が進んだ。長崎でも CO₂ 施用、天敵導入が進んだ。

四季成り／普通栽培（宮崎）：植え替え株と据え置き株による栽培。7 月と 10 月の収量は多かったが、7、8 月の高気温が影響し総収量はやや少なかった。据え置き株ではハダニの発生が目立った。気温が下がり始めてからは灰色かび病が発生した。

2) トマト

品種動向:品種に大きな動きは見られないものの、佐賀では多様化の動きがある。また、葉かび病抵抗性品種の導入が増加している。「麗容」、「CF 桃太郎はるか」、「感激 73」、「りんか 409」等が促成および抑制栽培用の主要品種。夏秋栽培用としては、「りんか 409」、「みそら 64」。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄）：[24 年定植] 沖縄を含め台風の被害もなく、初期生育はほぼ順調。11 月から 1 月の低温のため生育がやや抑制され、出荷が遅れた。しかし、2 月以降は高温傾向で日照にも恵まれ、通期としてはほぼ平年以上の作柄となった。全体としては、黄化葉巻病をはじめとする病害虫についても目立った被害はなかったが、宮崎では灰色かび病、葉かび病、サビダニ、コナジラミ類が発生した。大分において 4 月以降に軟果の発生がみられ、また、鹿児島では暖房費節減のため低温管理を行ったことで花落ちや着果不良がみられた。

普通栽培（熊本、大分）：天候に恵まれ生育は概ね順調に推移した。7、8 月の高温で裂果が認められたが、収量は平年並みからやや増。単価は平年並みからやや低めであった。すすかび病と青枯病が認められた。

3) ナス

品種動向:促成栽培用の主要品種は「筑陽」。単為結果性品種「省太」が福岡で、「佐賀 N1 号」が佐賀で、さらに「あのみり」が鹿児島で導入されてきた。早熟・普通栽培用としては、熊本で、「筑陽」、「ヒゴムラサキ」、「黒紫大長」等。

促成栽培（福岡、佐賀、熊本、鹿児島、沖縄）：[24 年定植] 福岡では定植から 1 月までの低気温により主枝の生育遅く、厳冬期の収量は平年を下回った。その後の天候の回復に伴って生育、収量ともに伸びたが、総収量はほぼ平年並となった。販売単価はやや低く推移した。福岡に続き、鹿児島でも株元加温が試みられている。虫害ではアザミウマ類の発生が目立ち、特に沖縄では防除が難しくなってきた。佐賀、熊本、鹿児島ではスワルフスキーカブリダニ等の天敵の利用による IPM 取り組みが進められている。病害としては、青枯病、すすかび病、灰色かび病が認められた。

早熟・普通栽培（熊本）：定植時後の冷え込みで生育が遅れたが、その後は天候に恵まれ、順調であった。8 月の高温で草勢の低下がみられたが、収量は昨年をやや上回った。青枯病、すすかび病およびアザミウマ類が発生。

4) ピーマン

品種動向:促成栽培の主要品種は、宮崎では「京鈴」、「みやざきグリーン」、鹿児島では「TM 鈴波」、「京鈴」、沖縄では「ちぐさ」。昨年に比べ品種数が絞られた。早熟・普通作型では、熊本で「京まつり」、「さらら」、「みおぎ」、大分で「さらら」、宮崎で「京鈴」、「京まつり」がそれぞれ栽培された。

促成栽培(宮崎、鹿児島、沖縄):[24年定植]宮崎では台風の影響で定植の遅れた圃場があった。11月からの低温傾向で草勢低下、果実肥大不足、収量低下が認められた。3月以降の好天で収量は回復し、総収量は平年並みとなった。例年に比べ、斑点病、黒枯れ病の発生は少なかった。鹿児島の1・2月の出荷量は平年並みであったが、3～5月は平年よりやや多かった。青枯病やコガネムシの被害有り。アザミウマ、コナジラミ対策として、スワルスキーカブリダニの利用が増加した。燃油高騰対策として、ヒートポンプ導入が進んでいる。沖縄では栽培の前進化が図られており、年内出荷量が増えた。23年に整備された集荷場の稼働率も高まった。低温の影響で病虫害の発生は少なかった。

早熟・普通栽培(熊本、大分、宮崎):熊本では、定植後の冷え込みでやや生育が遅れたが、それ以降は天候に恵まれて生育は順調であった。出荷量は平年をやや上回った。大分では、夏場の高温、強日射により、尻腐れ果、焼け果、そして青枯病が多発したため減収傾向だった。白絹病も認められた。品薄により単価は高かった。宮崎では定植後の日照不足により徒長気味で落花も多く、初期収量は少なめだった。梅雨明け後は高温・乾燥の影響で大分同様に、障害果の発生が多く、草勢も弱かった。8月中旬以降は気温も下がり始め、生育は概ね良好となり、収量も回復した。秋に入っても前半は高温傾向が続いたため草勢はやや弱めであった。夏の高温の影響で可販果率が低い傾向であった。

5)キュウリ

品種動向:同じ作型であっても、県、さらに産地により多様な品種が栽培されている。褐斑病抵抗性品種の導入が進んできた。促成栽培用品種としては、「極光 607」、「輝世紀」、「エクセレント節成1号」、「ハイグリーン」、ステータス系、アルファ系など。早熟・普通栽培では、「ステータス夏」、「ちなつ」、「ビュースター」、「南極1号」他が、抑制栽培では「ゆうみ 637」、「極光 607」、「ズバリ 163」、「エクセレント620/節成1号」、「輝世紀」、アルファ系やステータス系(熊本)他が、それぞれ利用されている。沖縄では、促成から抑制作型まで「輝世紀」および「エクセレント 353」が主要品種。

促成・半促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄):[24年定植]促成では定植後の生育は順調。12月定植の半促成(佐賀)では、低温・曇天の影響で子づるの出が悪く、初期収量が少なかった。全般に11月から2月にかけての低温の影響で生育の遅れ、収量低下がみられ、宮崎ではつる枯病、褐斑病の発生も多かった。2月以降は天候に恵まれ、生育は回復し、収量も増加した。ただ、成り疲れもみられ、宮崎ではつる枯病、べと病の発生も多くなった。収量的には、平均並みかやや上回ったところが多かった。

早熟・普通栽培(福岡、熊本、鹿児島、宮崎、沖縄):全般に7、8月の高温の影響で草勢低下がみられた。先細り果多発など品質も低下し、例年より早期に栽培を打ち切るところも多く、その分収量は伸びなかった。熊本および鹿児島ではほぼ平年並みの以上の作柄を確保した。沖縄では黄化えそ病の発生が多かった。

抑制栽培(福岡、佐賀、熊本、宮崎、沖縄):天候に恵まれ、定植後の生育は順調であった。福岡、宮崎では昨年並みの収量であったが、佐賀、熊本では増加した。福岡でアザミウマの多発があり、沖縄では定植後の立ち枯れ、また黄化えそ病が発生した。

キュウリ退緑黄化病や黄化えそ病対策(天敵スワルスキーカブリダニの導入、0.4mm 目合いの防虫ネット展張、UVカットフィルムの展張等)が、全地域、全作型で定着してきた。

6)スイカ

品種動向:促成・半促成および抑制作型用の大玉主要品種は、「祭りばやし 777」、「春のだんらん」、小玉は「マダーボール」、「ひとりじめ 7」。早熟・普通作型用の品種は、鹿児島では「夏太鼓」、沖縄では「朝ひかり SR」、「富士光 TR」。長崎で黒小玉スイカの作付面積が微増の他は、大きな動きはない。

促成・半促成栽培(長崎、熊本、沖縄):[24年定植]熊本では1月から2月に冷え込んだが、3月以降から順調に生育し、着果も安定した。例年になく果実肥大も良く、品質も良好で、前年と比べて出荷量増で単価はほぼ平年並み。沖縄では昨年引き続き、低温・寡日照による小玉化、白種化が多く発生した。虫害は、ハダニ、アブラムシ、コナジラミ、アザミウマ類が、病害は熊本でうどんこ病、沖縄で灰白斑紋病および菌核病がそれぞれ認められた。

早熟・普通栽培(鹿児島・沖縄):鹿児島では梅雨が早く明けて、作柄は良かった。

抑制栽培(熊本、沖縄):熊本では定植後から天候に恵まれ生育は順調。その後も着果、果実肥大とも良好で、出荷量、単価ともほぼ前年並み。

7)メロン

品種動向:「アンデス」、「クインシー」、「肥後グリーン」、「アールス雅」系、「アールスセイヌ」系、「ベネチア」系、「ユウカ」等の多様な品種が、産地・作型毎に展開している。鹿児島の早熟・普通栽培では「パパイヤ」、「タカミ」。品種の変動はほとんどない。

促成・半促成栽培(熊本):[24年定植]1月から2月に冷え込んだが、3月以降から順調に生育し、着果も安定した。例年になく果実肥大も良く、品質も良好で、前年と比べて出荷量増で単価は前年並み。

早熟・普通栽培(鹿児島):作柄は平年並みであったが、面積は漸減傾向。

抑制栽培(熊本、鹿児島、沖縄):熊本では、定植後は天候に恵まれ生育は順調。年内にかけても天候に恵まれ、着果も安定して、果実肥大、品質とも良好で、出荷量、単価ともほぼ前年並み。鹿児島では12月出荷の作型が燃油価格の高止まりを受け減少した。センチュウ害で収量半減した地域が一部で見られた。沖縄宮古地区では12月日照不足と寒暖差の影響により、着果不良、玉肥大の鈍化、果実の裂果がみられた。

病害として、いずれの作型においても、退緑黄化病、つる割病、うどんこ病の発生が認められた。

8)カボチャ

品種動向:「えびす」、「くりゆたか」の他、「くりほまれ」、「栗将軍」、「九重栗」、「ニュー黒皮」、「坊ちゃん」。長崎ではより貯蔵性の高い品種を検討している。

促成・半促成栽培(熊本、鹿児島、沖縄):[24年定植]熊本では年明けは1月から2月に冷え込んだが、天候に恵まれ、生育は順調。着果も安定して良く、果実肥大も良好であった。鹿児島は平年並みであった。沖縄では定植後の生育は順調であった。12月下旬に低温の影響を受けたが1~2月の高温で果実肥大も良く、例年になく豊作であった1月に発生した台風並の強風の影響を受けた圃場では、葉枯れやキズ果が発生した。3月下旬~4月中旬においては低温多雨となったことで疫病による被害が多く認められた。防風垣設置や低温時の着果安定対策をとっている。

早熟栽培(鹿児島):4月上旬の降霜、低温の影響で細菌病が多発し、収量は大幅な減少となった。生産者の高齢化と単価安の影響で作付面積は1割減少した。

抑制栽培(長崎、熊本、鹿児島、沖縄):長崎では、台風被害や高温干ばつにより小玉傾向。なお、抑制栽培での取り組みは減少傾向。熊本では天候に恵まれ、着果も安定して、果実肥大、品質とも良好であった。一方、鹿児島では台風の影響により着果不良となり、果実肥大期は干ばつにより果実肥大が劣り小玉傾向であった。沖縄では全般に低温、寡日照の影響で生育が遅れた。また低温で着果不良、肥大不足が目立った。全般に減収となった。

いずれの作型、産地においても、うどんこ病が広く蔓延。白斑病、疫病、アザミウマ、アブラムシによる被害が認められた。鹿児島では物理的防除と障壁作物(ソルゴー)を利用。

9)ニガウリ

品種動向:「えらぶ」(長崎、熊本、鹿児島)の他、鹿児島では「か交5号」、「チャンピオン」が栽培されている。沖縄では、「汐風」(抑制、促成、半促成)、「群星」、「夏盛」(早熟・普通:施設)、「島風」(早熟・露地:露地)。品種の変動は小さい。

促成・半促成栽培(長崎、熊本、鹿児島、沖縄):[24年定植]熊本、鹿児島では天候に恵まれ、作柄は平年を上回った。沖縄では9・10月定植分は台風で植え直しを余儀なくされたが、11月以降定植については、病害虫も例年に比べて少なく生育状況は概ね良好であった。低温時の着果安定対策技術確立が必要。

早熟・普通栽培(熊本、鹿児島、沖縄):熊本では平年並み。鹿児島では空梅雨気味で生育前進化し、収量は多かった。

抑制栽培(熊本、鹿児島、沖縄):熊本では定植後から天候に恵まれ、生育は順調。その後も天候に恵まれ、出荷量、品質とも良好。鹿児島では、高温乾燥の影響で定植が遅れた事に加え、数回に渡る台風の影響で前年より出荷量が減少した。沖縄(宮古)では秋の台風で植え替えを要したところもあった。12月中旬以降の低温と曇天の影響により、生育、果実肥大ともに緩慢となり、曲がり果や尻太果の発生も認められ、1月の収量は伸びていない。

うどんこ病、アザミウマ、アブラムシ、センチュウ被害が認められる。熊本でつる割病が発生しており、新土佐台木を導入。

10) サヤインゲン

品種動向:「ベストクroppキセラ」、「ビックリジャンボ」の他、「サーベル」、「ステイヤー」等。なお、沖縄では半つる性「ケンタッキーブルー」を中心に栽培。わい性インゲン(サーベル、キセラ)では長期収穫に取り組む農家が増えてきており、培技術実証圃を設置。また、大莢品種が増加傾向にある。

促成・半促成栽培(熊本、鹿児島):[24年播種]熊本、鹿児島ともに作柄は平年並。昨年に引き続き、鹿児島では冬場の日照不足に加えて、桜島降灰による日照不足が問題となっている。

早熟・普通栽培(鹿児島、沖縄):鹿児島は平年並み。沖縄北部では10月の台風により作付けが遅れ、年末に出荷増となった。年明けからは好天に恵まれ、3月にピークとなった。一方南部では9・10月に頻りに台風が接近したため、圃場準備と作付けの遅れが見られ、年内の出荷は少なくなった。1~2月の天候が良く日照に恵まれたため、年明け後に出荷量が増えた。

抑制栽培(長崎、鹿児島、沖縄):長崎では高温の影響で一部発芽不良・播き直しがみられ、さらに高温少雨の影響で生育遅延となった。鹿児島でも播種期の高温による発芽不良のため生育にバラツキがあった。また、台風被害によるまき直しにより出荷開始は遅れた。数量、単収は減少した。沖縄では10月下旬の台風の影響を受け、まき直しや栽培面積減少につながった。北部では11月下旬からの冷え込みで、年末出荷は減少したものの、大莢インゲンの面積増により生産量は前年並み。南部では年末は気温の低下もあり全体的に莢の肥大が遅い。

アザミウマ、ヨトウガの発生が多く、その他病虫害として、うどんこ病(熊本)、菌核病(沖縄)、ハダニ、チャノホコリダニ等が認められた。

11) ソラマメ(鹿児島)

品種動向:主要品種は、「陵西一寸」、「さくら一寸」、「ハウス陵西」、「唐比の春」。品種は替わらず。

秋まき栽培:生育、着莢ともに良好で、収量は平年並み。

夏まき栽培:生育初期(9月上旬~11月上旬)が高温のため、下節位の着莢が非常に少なかった。11月中旬以降の気温が平年並みから平年より低く推移したため、中節位以降の着莢は良好であった。3月上旬から収穫期の最盛期になった。収量は平年よりやや少ない見込み。さび病が発生。アザミウマに対して、IPM 防除技術確立。

12) エンドウ

品種動向:「ニムラサラダスナップ」が主要品種。他に、「スーパーグリーン」、「あくねグリーン」、「南海緑」。特に動きはない。

秋まき栽培(鹿児島):鹿児島における実エンドウは、平年より気温の低下が早かったため生育が遅く、収量は平年よりやや少ない。スナップエンドウも同様に、収量は平年よりやや少ない。なお、アザミウマ類の発生が多く、莢に白ぶくれ症が多かった。

夏まき栽培(長崎):ハウス栽培、露地マルチ栽培。台風の影響があったが播き直しにより面積は維持。

病虫害として、うどんこ病、褐紋病、褐斑病の被害が認められた。長崎では反射性のミラーマルチ利用。

13) オクラ

品種動向:主要品種は、「ブルースカイ(G、Z)」、「ニュースカイ」、「フィンガーファイブ」、「ガリバー」他。

促成・半促成栽培(鹿児島、沖縄):[24年播種]鹿児島では気温は高めで推移し、生育は良好で、平年より1割増収した。沖縄石垣島では1~2月播種のトンネル栽培で、4月の低温多雨による立枯れや生育遅れで収穫が遅れ、最盛期となった7月上旬襲来による被害で減収した。その後、切り戻しにより出荷量は回復したが、相次ぐ台風接近による被害で9~10月に収穫を終える圃場が多かった。

早熟・普通栽培(熊本、鹿児島、沖縄):熊本では初期生育が遅れたところがあったが、その後天候に恵まれ、生育は順調であった。鹿児島では高温、乾燥により病害虫の発生はやや多く、また、心止まりやアントシアン果の発生もみられたが、6~7月の草勢はやや良好で平年より1割増収した。沖縄(中部・八重山)における春まき露地栽培(2~4月播種)で、4月の低温多雨により、苗立枯病、疫病や立枯病も多く発生し、さらに最盛期の7月中旬に台風が来襲したため切り戻しを余儀なくされた。その後、収量は回復したが、相次ぐ台風接近により9~10月までに収穫を終える圃場が多かった。沖縄(宮古)では低温時の発芽不良や排水不良圃場での立ち枯れが多くみられた。またネコブセンチュウ発生、オオタバコガによる食害など課題が多かった。

抑制(沖縄):沖縄(石垣)では台風接近が多かったことや、春まき(早熟)栽培で切り戻し栽培の普及により抑制栽培の面積は減少。

3. 葉根菜類

1) アスパラガス

品種動向:「ウエルカム」。品種の動きはほとんどない。「スーパーウエルカム」他が一部で導入。

半促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本):北部九州各県ともに、前年秋の好天と12月の冷え込みの影響で養分蓄積量が多かったことや2~3月に気温が高く推移したため、生育は進み、春芽の収穫量は平年より多かった。また、5月中下旬の天候も良かったため立茎が順調に行われ、夏芽の収量も多かった。各県ともに平年を上回る作柄で、佐賀では販売数量・販売金額ともに前年より多く、過去最高の実績となった。

茎枯病の他、斑点性病害(斑点病・褐斑病)、アザミウマ、ヨトウガの発生がみられた。なお、夏季の高温対策として、寒冷紗被覆が推進されている。

2) ネギ

(1) コネギ

品種動向:産地、季節に応じて使い分けて周年栽培。福岡の周年栽培では「FDH」と「冬彦」が2大品種、佐賀では「鴨頭」、「冬彦」、鹿児島では「鴨頭」。大分では「若殿」が主で、「冬彦」、「ストレート」など耐倒伏性品種を導入。

周年栽培(福岡、佐賀、鹿児島):福岡では4~6月どりは順調であったが、夏の高温乾燥、秋の曇雨天、冬の低温で以降は平年を下回った。佐賀もほぼ同様。

秋まき栽培(大分、鹿児島):[24年播種]大分では生育は順調で前年よりも出荷量が増加した。葉先枯れがやや多く発生した。3月の出荷量は大きく増加した。鹿児島では平年並みであった。

冬まき栽培(大分、鹿児島):大分では2月からの気温が高く、生育は順調で前年よりも出荷量が増加した。鹿児島では平年並み。

春まき栽培(大分、鹿児島):大分では前期の生育は良好であったが、後半の梅雨時期の日照不足、その後的高温で出荷量は減少した。鹿児島では平年並み。

夏まき栽培(大分、鹿児島):大分では高温により発芽不良、生育遅延があり、出荷量は8割となった。鹿児島では平年並みであった。

ネギハモグリバエ、アザミウマ、また根腐萎凋病およびボトリヌス菌による葉先枯れの発生が認められた。虫害抑制のため、UVカットフィルムの導入拡大。

(2) ネギ

品種動向:主要品種は、「羽緑一本太」、「龍まさり」、「関羽一本太」、「夏扇4号」、「龍翔」等、作型・産地(標高)に応じて使い分け。

夏まき栽培(大分、鹿児島):[24年播種]大分では収量は昨年を上回った。鹿児島では育苗期の高温による立ち枯れあり。

秋まき栽培(大分、鹿児島):[24年播種]大分、鹿児島ともに平年並み。

冬まき栽培(大分、鹿児島):[24年播種]大分は平年並みであったが、鹿児島は抽台が早めであった。

春まき栽培(大分、鹿児島):大分では早い梅雨明けとその後の高温、8月下旬の多雨により、軟腐病、白絹病、萎凋病が多発し、生育遅延が全面的に生じ、生産量が大幅に減少した。夏季昇温抑制技術の検討を進めている。鹿児島の作柄は平年並み。

3)タマネギ

品種動向:早出し用として「貴錦」、「浜笑」、「レクスター1号」、普通用として「ターザン」、「もみじ(3号)」、「七宝甘70」他が、作型に合わせて栽培されている。沖縄では「F1037」、「F50」。

秋まき(早出し)栽培(佐賀、長崎、鹿児島):佐賀、長崎ともに低温により初期生育は遅れたものの2月以降の天候の回復により平年並みの収量になった。鹿児島では全般に天候に恵まれ、生育は順調で、反収は平年より多かった。なお、佐賀では早生の面積が増加し、また、全自動定植機の利用率は4割を超えた。

秋まき(普通)栽培(佐賀、長崎、沖縄):佐賀、長崎ともに低温により初期生育は遅れたものの2月以降の天候の回復により生育は順調で平年並み以上の作柄となった。全国的な豊作で単価は低迷した。沖縄(宮古)ではセット球を用いたトンネル栽培が行われている。セット球の植え付けは9月で、10月の台風は防風ネットベタがけで対応した。台風後、白色疫病の発生が見られた。なお、長崎では業務加工用の「ターザン」の作付けが増えている。

病虫害として、べと病、灰色腐敗病、アザミウマの発生が認められた。

4)ニラ(大分)

主要品種は「タフボーイ」、「スーパーグリーンベルト」。半促成(春まき冬どり)では低温伸長性の品種を模索中。

半促成(冬どり)栽培での作柄は良好であり、品質も良かった。白斑葉枯病がみられた。普通(夏どり)栽培での出荷量は平年並みで、品質も良好であった。葉先枯れ生理障害、アザミウマが発生した。

5)レタス

品種動向:産地、作型に対応し、「ツララ」、「アストラル」、「ステディ」他。佐賀では「サウザー」、「ステディクラシック」が業務用として周年用いられる。沖縄では秋まき用に「ラプトル」、冬まき用に「グリーンストーン」が栽培される。

秋まき栽培(佐賀、長崎、鹿児島、沖縄):佐賀は順調。長崎では定植時期の干ばつや高温により一部でタコ足球や軟腐病が発生した。鹿児島では、寡日照により平年より生育は遅れ気味であったが、作柄は平年並みであった。沖縄(南部)では、台風で定植が遅れ、収穫も1ヶ月遅れ、作付面積も減った。

冬まき栽培(佐賀、沖縄):佐賀は順調であった。沖縄(南部)ではタイワンシロガシラの被害は多く発生したものの、生育は順調であった。

夏まき栽培(佐賀):9月の雨で定植が遅れ、出荷もやや遅れた。

病虫害被害の発生は少なく、軟腐病が認められた程度。沖縄のタイワンシロガシラ対策として、防鳥ネットが講じられている。

6)ホウレンソウ(佐賀、鹿児島)

産地、作型によりきわめて多数の品種が栽培される。秋・冬まき用として佐賀では「ハンター」、「トラッド7」、鹿児島では「アクティブ」、「パレード」、春・夏まき用として「プリウス」、「ニュー進太郎」、「パレード」、「トラッド」他。

ホウレンソウは栽培期間短く、また集約的に栽培されることから、気候の影響を受けにくい。いずれの

産地、作型においてもほぼ順調な生育であった。ただし、佐賀の 25 年夏まきでは、晴天日が続き、猛暑となったため発芽不良・生育不良により 8~9 月の収量が減少し、品質も低下した。収量は伸び悩んだが、単価は期間を通して高かった。

佐賀ではケナガコナダニと萎凋病、鹿児島ではヨトウムシが認められた。

7) コマツナ(長崎、鹿児島)

長崎の夏まき栽培では「いなむら」。鹿児島における春・夏まき栽培用として、「菜々美」、「わかな」、「黒わかな」、秋・冬まき栽培用として「わかな」が栽培される。

ホウレンソウと同様に、栽培期間短く、また集約的に栽培されることから、気候の影響を受けにくい。いずれの産地、作型においても生育は順調で、平年並みの収量であった。長崎では夏期の収入源として一部に導入された。

ヨトウガ、キスジノハムシ発生が認められ、防虫網を利用。

8) ハクサイ(長崎、鹿児島)

品種動向:産地、作型により多様な品種が栽培される。長崎の冬・春まき栽培では「春眉山」、「春物語」、鹿児島の秋まき栽培では「黄ごころ」、冬・春まき栽培では「菊錦」、「黄楽」、夏まき栽培では「晴黄 90」、「晴黄 85」が用いられた。

長崎の冬・春まき栽培では、2 月以降の温暖の影響で生育が前進化し、心腐れ、抽台発生が多かった。また、3 月以降、貯蔵ハクサイとの競合で低単価となった。鹿児島では秋まき、冬・春まき、夏まきともに平年並みの作柄であった。

病害虫としては、長崎で軟腐病、菌核病による被害が、また鹿児島ではハスモンヨトウが発生した。

9) キャベツ

品種動向:産地、作型により多様な品種が栽培される。佐賀の秋まきおよび冬・春まき栽培では「T-532」、「夢舞台」、「錦秋」、「さつき王」が、また、鹿児島の秋まき栽培では「金春」、「輝岬」、「初恋」が、沖縄では「はやどり」、「ビューティボール」が栽培された。沖縄では軟腐病に強い「ビューティボール」への移行中。夏まき栽培では「いろどり」、「松波」、「夢舞台」、「夢ごころ」、「金春」等。

秋まき栽培(佐賀、鹿児島、沖縄):[24 年播種]いずれの地域でも概して生育は順調で、平年並み。沖縄では小玉傾向であった。佐賀では水田裏作作物として推進中であり、有望品種の選定が進められている。鹿児島では畦内施肥が一部で採用されている。

冬・春まき栽培(佐賀):気象条件がよく、順調な出荷であった。

夏まき栽培(佐賀、鹿児島):佐賀では定植後の干ばつの影響で生育が遅れ気味であった。一方、鹿児島では順調な生育で、平年よりやや早かった。

病虫害としては、軟腐病、菌核病、アザミウマが各地で認められた。

10) ブロッコリー

品種動向:「ピクセル」が広く利用され、他に「グランドーム」、「しき緑 96 号」、「彩麟」など。佐賀、長崎では有望品種選定中。

秋まき栽培・冬春まき(福岡、佐賀):[24 年播種]定植時期の乾燥、厳冬の影響で生育の遅れなども見られたが、各地ともに平年並みの作柄。佐賀では水田裏作として作付け推進。

夏まき栽培(福岡、佐賀、長崎):福岡の 8 月定植作型では大雨による生育不良、9 月定植作型では高温による定植遅れ(1週間程度)のため、10 月~11 月の出荷量が例年より減少した。佐賀、長崎もほぼ同様に推移した。長崎では作付け面積の増加にともない、共同選別体制が整備されてきた。

いずれの産地、作型においても根こぶ病発生が問題である。

11) ダイコン

品種動向:産地、作型によりきわめて多数の品種が栽培される。また、品種の動きも速い。冬まき用として「初嘗」、「春慶」、春まき用として、「つや風」、夏まき用として「夏天下」、「夏の守」、秋まき用として「夏みどり 8 号」、「冬侍」他。鹿児島の冬・春まきでは内部が白く、総太りの品種が増える傾向があり、また、夏まきでは空洞症の少ない「夏の守」へと移行。

冬まき栽培(長崎、鹿児島):[24年播種]長崎では生育遅れがあり、さらに播種の早い秋冬ダイコンと出荷が重なり単価は低迷。鹿児島では冬の低温、3月の高温により、抽台が認められた。長崎ではJA作業班による労力確保が行われている。

春まき・夏まき栽培(鹿児島):春まきは平年並みであったが、夏まきでは乾燥により肥大遅れ、短根となる傾向が見られた。

秋まき栽培(長崎、鹿児島):長崎では発芽不良及び生育不良があった。一部台風により播き直しがあったものの大きな影響は見られなかった。他産地の台風被害の影響により単価は高めに推移した。鹿児島では各種の生理障害が例年よりも多かった。

病虫害は、長崎では黒斑細菌病、白さび病、軟腐病が、鹿児島では鱗翅目類、そして特に夏まきでキスジノミハムシが認められた。また、鹿児島では横縞症、亀裂褐変症、針状黒変、空洞症などの生理障害が発生している。

12)ニンジン

品種動向:主要品種は「向陽2号」、その他「ベータ312」、「愛紅」、「黒田五寸」。沖縄の秋まきでは「TE30」が用いられる。

秋まき栽培(長崎、鹿児島、沖縄):(24年播種)長崎では生育はおおむね順調で出荷量増となった。品質面も良好であったが2L、3Lの割合が多く、単価を引き下げた。長崎ではJA作業班による労力確保が行われている。

春まき栽培(鹿児島):梅雨入り後、黒葉枯病の発生があった。

夏まき栽培(長崎、鹿児島):播種時期に長崎では豪雨による欠株や播き直しが、鹿児島では乾燥による発芽不良立ち枯れが認められた。長崎ではその後の天候の回復により順調に生育した。

13)ゴボウ

品種は「柳川理想」、「山田早生」他。鹿児島では加工用として「常豊」を普及。

秋まき栽培(福岡、鹿児島):(24年播種)福岡では8月末から9月下旬播きの初期生育は順調であったが、11月以降の低温と3月の急激な温度上昇により、収穫適期前に抽台する株の多発が一部圃場でみられた。鹿児島では天候不順による生育遅れや乾燥・低温による生育の遅れもみられたが、全体的には良好で、反収は近年で最も良かった。

冬まき(鹿児島):(24年播種)11~1月の気温が例年より低く初期生育は遅れ気味であったが、概ね生育は良好であった。増収を目指し、不織布直がけ技術を普及に移した。

春まき栽培(鹿児島):生育は順調だったが、8月中旬(盆すぎ)の収穫は品質が低下した。

病虫害として、黒あざ病、ハスモンヨトウ、コガネムシ。輪作、残渣の撤去、土壌消毒を実施。

14)バレイショ

品種は、「ニシユタカ」、「メイクイン」、「デジマ」、「アイユタカ」、「さんじゅう丸」。「さんじゅう丸」が春作で増加。

春作(長崎):降雨のため植え付けできない圃場が見られた。また、発芽不良も見られた。4月以降の乾燥の影響で小玉傾向であった。

秋作(長崎、沖縄):長崎では植え付け時期の降雨とその後の早魃の影響がみられ、生育がややおくれ小玉傾向。沖縄では全体的に生育は平年並みであった。一部圃場でウイルス被害があった。

病害ではそうか病、青枯病、疫病が、虫害としてはアブラムシが発生。

15)サツマイモ(大分)

高糖度品種「べにはるか」の他に、「ベニアズマ」、「高系14号」。4月の霜害、5月の小雨により欠株や活着不良が多発した。そのため、イモ肥大にはばらつきが生じた。収量は平年より多かった。

16)サトイモ(鹿児島)

品種は「石川早生丸」、「大吉」、「大和」他。早熟・普通作型。台風の影響で葉傷みがみられたが、生育は平年並みであった。障害として、芽つぶれ、裂開。

(野菜茶業研究所野菜育種・ゲノム研究領域長 坂田好輝)